≪調査研究事業≫

２０２４年度「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究事業概要

１．はじめに

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究は、福岡県・宗像市・福津市・宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会によって進められている。以下、令和６年度に本遺産群に関連して行われた各調査研究の概要を以下に報告する。

２．特別調査研究事業

本協議会では、世界遺産登録時の勧告「日本および周辺諸国における海上交流、航海およびそれに関連する文化的・祭祀的実践についての研究計画を継続・拡大させること（Decision : 42 COM 8B.44）」を受け、平成30年から令和4年度まで「古代東アジアの航海・交流・祭祀と信仰」をテーマとして特別研究事業を進めてきた。それらの成果は、一旦、報告書、書籍、動画等によりこれまで国内外に広く発信してきた。

一方、第１期特別研究事業には、残された課題もある。一つは、航海を軸としたアジア・太平洋、東アジア、日本列島内のさまざまなレベルでの地域間交流の視点からの検討である。次に、神話学・宗教学など新たな枠組みでの意義付けである。また、古代から中近世までの通史的な沖ノ島および宗像地域の祭祀について、より解像度の高い復元である。

これらの３つの残された課題を受け、令和６年度から10年度まで５カ年の計画で、第２期特別研究事業を開始し、この課題に取り組むこととした。あわせて基礎研究の推進を目的として、今期より、新たに、沖ノ島出土品を調査研究の対象とする国宝部会と地元の文化財担当者・学芸員からなる地域史部会の二つの部会を設けることとなった。

（１）第１回国際検討会

第２期で初回となる本会議は、「海域のネットワーク－交流と祭祀・信仰の変化－ Maritime Networks and Changing Beliefs」をテーマに行った。海を舞台とした交流によって固有の祭祀・信仰が長期にわたり変化したヨーロッパ、アジア・太平洋における事例との比較、および、日本列島全体での祭祀・信仰の変化を検討し、本遺産群の世界的な意義を探った。

第一回国際検討会「海域のネットワーク－交流と祭祀・信仰の変化－」

日　時：令和６年12月21・22日（土・日）
場　所：アクロス福岡
講演者：
石村　智（東京文化財研究所、無形文化遺産部長）
ガミニ・ウィジェスリヤ（ICCROM顧問アドバイザー、WHITRAP特別顧問）
クリストフ・サンド（ニューカレドニア政府、フランス国立持続可能開発研究所（IRD- Nouméa））
ファビオ・ランベッリ（カリフォルニア大学教授）
サイモン・ケイナー（セインズベリー日本藝術研究所統括役所長）
議　長：
佐藤　信（専門家会議委員長、東京大学名誉教授）
溝口　孝司（専門家会議委員、九州大学教授）
委託研究者：
秋道　智彌（山梨県立富士山世界遺産センター、総合地球環境学研究所名誉教授）
禹　在柄（忠南大学校教授）
高田　貫太（国立歴史民俗博物館教授）
田中　史生　（早稲田大学教授）
笹生　衛　（國學院大学教授）
大高　広和　（大正大学文学部専任講師）

研究協力者：
王　海燕（中国浙江大学教授）
国宝部会　：
河野　一隆（東京国立博物館学芸研究部長）
辻田　淳一郎（九州大学教授）
地域史部会：
岡寺　未幾（福岡県九博・世界遺産室）
正田　実知彦（福岡県九博・世界遺産室）
野木　雄大（福岡県文化財保護課）
加藤　和歳（福岡県九州歴史資料館）
池田　拓（宗像市世界遺産課）
太田　智（宗像市世界遺産課）
井浦　一（福津市文化財課）
池ノ上　宏（福津市文化財課）
崎野　祐太郎（福津市文化財課）
髙木　慎太郎（福津市文化財課）
福嶋　真貴子（宗像大社文化局）
オブザーバー：
鈴木　地平（文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室、文化財調査官）
岡田　保良（日本イコモス国内委員会委員長）
リリアナ・ヤニク（ケンブリッジ大学考古学部研究部次長）
エレン・ヴァン＝フーテム（九州大学 准教授）

図１　第１回　国際検討会

（２）国宝部会

本部会は、沖ノ島から出土した奉献品から古代祭祀の解明をめざして設置され、４名の古墳時代の専門家からなる。

今年度は、石製品･石製模造品、鏡および武器･武具などの金属製品を対象として宗像大社神宝館での調査を行い、今後、必要な調査について検討を行った。

なお、国宝部会の先生には、令和６年度第３回公開講座においてのご講演をお願いした。

国宝部会メンバー：
河野　一隆（東京国立博物館学芸研究部長）
辻田　淳一郎（九州大学教授）
橋本　達也（鹿児島大学博物館教授）
水野　敏典（橿原考古学研究所）

第一回　国宝部会
日　時：令和６年 10 月 16 日（水）オンライン

第二回　国宝部会
日　時：令和７年３月７日（金）
場　所：宗像大社神宝館

宗像大社神宝館における国宝沖ノ島出土品調査
・石製品・石製模造品の調査
調査者：河野一隆
日時：令和６年８月１・２日、11 月 14・15 日
・鏡の調査
調査者：辻田　淳一郎
日時：令和６年 10 月 11・25 日、11 月１日
・武器・武具等金属製品の調査
調査者：橋本達也、水野敏典
日時：令和６年９月 24 から 27 日

（３）地域史部会

地域史部会は福岡県・宗像市・福津市・宗像大社の文化財担当者・学芸員からなる。本遺産群について分野を超えた調査研究を推進して、より解像度の高い宗像の祭祀の復元を目指して設置された。今年度は３回開催し、各自の調査研究についての進捗状況の共有を行った。
第１回　令和６年 10 月９日（水）
第２回　令和６年 12 月４日（水）
第３回　令和７年２月 18 日（水）
(岡寺　未幾　福岡県九州国立博物館・世界遺産室)

３．宗像大社にかかる調査研究

（１）考古資料

ア．土器詳細台帳の作成

平成29年度より、報告書に基づく土器詳細遺物台帳の作成作業を九州大学考古学研究室と行っている。本年度は、令和６年５月19日から令和７年３月６日まで計七回実施した。

令和４年度末、沖ノ島祭祀遺跡調査報告書と照合できなかった土器・土製品資料（以下、「照合不可品」と表す）すべての台帳化作業が終了し、作成資料の内容見直しを行ったところ、報告書と照合できた土器・土製品資料（以下、「照合品」と表す）と照合不可品の重複が判明したため、令和５年度、これまで作成した一覧表・個体カードの内容見直し作業を実施した。今年度も同作業を継続し、昨年度着手できず残っていた計74個体分について、一覧表・個体カードと遺物情報（原物・報告書掲載内容）に齟齬がないか、見直しを行い完了した。本作業では、照合品と照合不可品の重複、誤って照合不可品とされた照合品の抽出、作成資料の記入ミス等の修正・調整を行った。

次に、台帳化作業を終えた照合品と照合不可品の一覧表・個体カードについて、表現・表記の統一作業を実施した。

以上の作業対象品は宗像大社神宝館で保管中のものだが、一方で、宗像大社旧宝物館で保管中の大量の土器片（国宝沖ノ島祭祀遺跡出土品、沖ノ島旧社務所前遺跡出土品）の台帳化作業にも着手した。作業の対象品は、報告書照合品全79点と、武末資料全70点である。照合品は一覧表・個体カードの作成および写真撮影を実施、武末資料は一覧表・個体カード・台帳カードの作成および写真撮影を完了した。

なお、「武末資料」とは、武末純一氏が論考「沖ノ島祭祀の成立前史」（『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅰ「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議2011年）執筆のための調査で作図した土器片全70点で、うち23点は同論考に掲載されている。現在、宗像大社では当該品を「武末資料」として管理している。

令和７年３月、関係者で協議し、今年度作業の進捗と来年度の作業内容を確認した。

（福嶋　真貴子　宗像大社文化局）

イ．金属製品のＸ線撮影による調査分析及び金属製品デジタル台帳の構築

沖ノ島祭祀遺跡から出土した金属製品は、発掘から半世紀以上が経過し、劣化が懸念されている。この状況を受け、令和六年度文化庁補助事業Innovate MUSEUM事業により、当該資料と宗像市・福津市から出土した金属製品約4000点のＸ線透過写真撮影とデジタル台帳の作成を行った。Ｘ線透過撮影は令和６年８月５日より21日まで、宗像大社神宝館に機材を持ち込み、元興寺文化財研究所に委託して行った。撮影で得られたＸ線画像データを１点毎に分割し、個別の資料の基礎データを新たに構築したデータベースに登録することにより、主要な金属製品のデータベースでの管理が可能となった。令和７年２月現在、登録点数は4536点に上る。なお、この「金属製品データベース」は、既存のデジタルアーカイブMUNAKATA　ARCHIVESに増設の形で行った。

このデータベースは、本遺産群の世界遺産ガイダンス施設である海の道むなかた館を中核として、宗像大社神宝館、大島交流館、カメリアステージ歴史資料館、九州歴史資料館、九州国立博物館の日頃より連携する５館の文化財担当者・学芸員および関係する専門家がアクセスでき、今後、横断的な調査研究の推進が期待される。

また、データベースのうち基本情報は令和７年２月よりMUNAKATA　ARCHIVES「金属製品のＸ線画像」として一般公開され、研究者から一般まで、今後の幅広い活用が期待される（https://www.munakata-archives.asia/frmSearchMetalDigitaPhotoList.aspx）。

ウ．国宝部会による国宝調査

特別研究事業国宝部会において、石製品・石製模造品、鏡および武器・武具などの金属製品を対象として宗像大社神宝館での調査を行った。その成果については、本号「特集：奉献品から沖ノ島祭祀を考える」をご覧いただきたい。

（岡寺）

（２）宗像大社文書調査

平成29年度から継続して「宗像清文氏奉納文書」のうち書簡・公文書等の一紙ものの目録の作成を行っている。令和６年度は令和７年１月までに12回の調査を実施し、年度内にさらに数回の調査を予定している。

調査は、宗像大社文化局、福岡県教育庁文化財保護課、福岡県立アジア文化交流センター、九州歴史資料館、福岡市博物館市史編さん室が協力して行い、今年度は史料の全体数の把握と目録の史料名の統一作業を優先して実施した。次年度も継続して調査を実施する。

今年度の調査の中で、近世の大宮司館に関する絵図が確認された。近世大宮司館は未解明の部分が多く、新知見が得られる史料と期待される。同史料については詳細調査後に報告を行う。

なお、「宗像清文氏奉納文書」に係る調査成果の一部は、第２期特別調査研究事業の成果報告書において公開する予定である。

（野木雄大　福岡県文化財保護課）

（３）経過観察　宗像市

ア．「宗像神社境内」全体に関する調査

宗像大社沖津宮である沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩の構成資産については、周辺海域を含めた釣人などのモニタリング調査を９回（令和６年１月27日（土）・２月12日（月）・３月10日（日）・５月５日（日）・８月24日（土）・９月14日（土）・10月12日（土）・11月９日（土）・12月７日（土））実施した。そのうち10月12日と11月９日には各祭祀遺跡の詳細なモニタリング調査を実施した。また、過去のモニタリング調査で遺物の出土が確認されている９号遺跡、10号遺跡、10号遺跡東側の遺跡については、６月３日（月）と６月４日（火）の一泊二日で詳細な遺構図面を作成した。

あわせて、沖ノ島と小屋島、御門柱、天狗岩は、国指定沖ノ島鳥獣保護区及び同特別保護地区であることから、環境省九州地方環境事務所によって外来ネズミ類対策調査が実施され、オオミズナギドリやカンムリウミスズメなどに与える影響を調査した。

中津宮では、11月19日（火）に祭祀遺跡等のモニタリング調査を行った。

辺津宮では10月４日（水）に市民の会とともに資産の見回り活動を実施、11月20日（水）には祭祀遺跡のモニタリング調査を実施した。

12月19･20日（木･金）には、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群国際専門家会議の現地視察として、クリストフ･サンド氏等が現地を訪れた。

現地調査関係者は以下の通りである。

福岡県九州国立博物館・世界遺産室　正田実知彦

宗像市世界遺産課　白木英敏　花田雄二　岡崇

イ．構成資産１　沖ノ島

９号遺跡、10号遺跡、10号遺跡東側における遺物の出土状況について重点的にモニタリング調査を実施した。

その結果、10月から11月にかけてのオオミズナギドリの巣立ちの時期を迎えるころに遺物の露出が顕著になることが昨年同様明らかとなった。

また、７月に降った大雨で禊場横の鳥居側の土砂が崩落したとの情報があり、沖ノ島全体で同様の崩落がないか確認した。落石が確認された禊場周辺の法面は、復旧整備が必要ではないかとの意見があり、福岡農林事務所職員同行のもと現地を確認した。現状は、小規模の崩落であり、整備の必要はないと判断した。

その他、土砂崩落した場所は、ポンノセの奥の崖、オウベラの斜面２か所、ワレノハナ側の斜面１か所、ビロウが生育する前の谷で１か所、二ノ岳と三ノ岳の間の１か所、漁港の東端と鳥居横の８カ所に上ったが、その後のモニタリング調査で徐々に元の状態に戻っていることが確認できた。

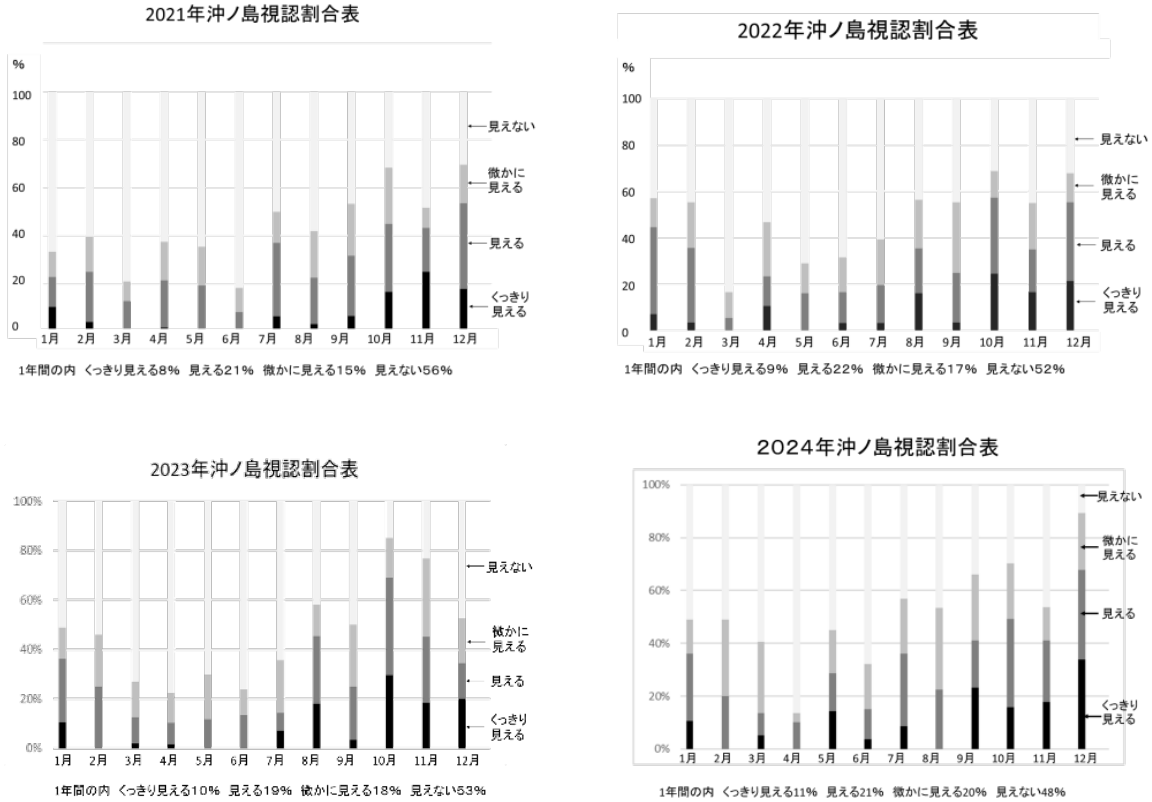

図２　沖ノ島視認割合表（令和３年から令和６年）

ウ．構成資産２　小屋島

小屋島の調査では、環境省九州地方環境事務所などの職員が上陸し、ネズミなどの有害生物の調査を実施した。その他は船上からの目視で、大きな変化はなかった。

エ．構成資産３　御門柱

船上からの目視で大きな変化はなかった。

オ．構成資産４　天狗岩

船上からの目視で大きな変化はなかった。

カ．構成資産５　沖津宮遙拝所

12 月 20 日に国際専門家会議の視察を実施した。この日は空気が澄んでいたことから、沖ノ島の岩肌まで見ることができた。

キ．構成資産６　宗像大社中津宮

11 月 19 日に御嶽山祭祀遺跡のモニタリング調査を実施した。昨年同様、御嶽山山頂から南側斜面にかけて土器の散布が認められた。また 12 月 20 日の国際専門家会議の視察では有孔土器などの散布も確認できた。

ク．構成資産７　宗像大社辺津宮

10 月 4 日に実施した宗像市世界遺産市民の会の見回り活動では大きな変化は認められなかった。

11 月 20 日に実施した下高宮祭祀遺跡のモニタリングでは、昨年より遺物の散布数が減っていた。

12 月 19 日に行われた国際専門家会議の視察で世界遺産登録以降の境内の整備状況などが確認された。

また宗像大社による摂末社の修復が引き続き実施された。本事業は来年度終了する予定。

ケ．その他の調査

・釣人調査

沖ノ島とその周辺の防波堤や岩礁、小屋島、御門柱、天狗岩に上陸している釣人の調査を実施した。

令和６年４月は天候との調整がつかず、酷暑

である７月は例年より釣人がいない傾向にあるため実施しなかった。

１月、２月、３月及び５月は、30 人から 70 人を超える釣人が確認され、７月同様、８月、９月は高温状態が続いたこともあり釣人の上陸がなく、10 月、11 月は再び 20 人前後の釣人が確認できた。

・沖ノ島視認調査

沖ノ島への眺望が世界遺産の価値の１つでもあることから、大島の北、大島砲台近くのトイレ壁に設置したカメラを使って、ほぼ毎日、午前９時前後と午後３時前後の２回沖ノ島視認調査を実施した。この調査は令和３年から実施している。

令和６年は、全体の傾向として、１月以降視認度が低下し、４月が最も沖ノ島を見ることが難しい月で、３月から６月が見えづらい時期といえる。７月以降は徐々に視認状態が回復し、12 月が例年になく最もよく見える日が続いた。

令和３年からの傾向としては３月、４月が見えづらく、10 月と 12 月が良く見える日が多い。令和５年以外、11 月に一旦視認割合が下がる傾向にあるが、全体的に上半期が見えにくく、下半期が見えやすいことがわかる（図２）。

(岡　崇　宗像市世界遺産課・正田　実知彦　福岡県九州国立博物館・世界遺産室)

４．宗像市管内文化財調査

令和６年度は開発等により発掘調査に至った事例はなかったが、国庫補助事業として池田桜 B-3 号墳（６世紀末～７世紀前半）の保存目的のための範囲確認調査を実施した。本古墳の主体部は全長約 14m に及ぶ宗像市域最大級の横穴式石室で、全長 60 m前後の前方後円墳である可能性があり、２ヶ年かけて調査を行い、墳形・規模・時期等を明らかにする。

（白木　英敏　宗像市世界遺産課）

５．新原・奴山古墳群に関わる調査

新原・奴山 34 号墳は、６世紀中頃～後半頃に築造された円墳として知られている。現状の墳丘は、直径約 19 m、高さ約６ｍを測り、墳丘の周囲は開墾で平坦な畑地に削平されている。令和３年度～令和５年度に実施された確認調査では、墳丘から南東方向に延びる墓道、複室構造の横穴式石室、隣接する 35 号墳の周溝等が確認された。令和５年度から令和６年度は、墳丘北西側の平坦部で検出した遺構群の調査を実施した。その他、平坦部には古墳関連遺構よりも古い時期の竪穴建物や土坑等が分布しており、焼失住居と思わしき竪穴建物も１棟確認されている。新原・奴山古墳群が造営された丘陵及び周辺では、５世紀代を中心とした集落跡が確認されている。34 号墳調査は、令和６年度で終了する予定である。

新原・奴山５号墳と６号墳は、ともに６世紀後半頃に築造された単室構造の横穴式石室を有する円墳である。墳丘規模は５号墳が直径約 13 m、６号墳が直径約 10 m強を測る。両古墳は大型農業施設建設に伴う昭和 55 年の記録保存調査を経て消滅したと考えられていたが、令和６年度に残存状況の確認調査を実施したところ、５号墳と６号墳ともに石室の一部が残存することを確認した。令和７年度にかけて他遺構の有無も含めた精査を行い、石室及び墓道の残存状況確認を目的として発掘調査を進める。

（﨑野　祐太朗　福津市文化財課）

図３　新原・奴山６号墳の石室調査

６．福津市管内文化財調査

一般開発に伴い２件の埋蔵文化財発掘調査を実施した。蓮鳥遺跡第４地点は古墳時代～中世の集落遺跡、宮司蓮町遺跡第２地点は弥生時代の集落遺跡である。また昨年度に発掘調査を実施した花見遺跡、在自西ノ後遺跡第７次調査、宮司浜ノ久保遺跡第３地点、津屋崎山川遺跡、手光立花木遺跡の５遺跡について文化財調査報告書を刊行した。

（松永　通明　福津市文化財課）

７．その他の活動報告

（１）公開講座

令和６年度文化庁補助事業「地域文化財総合活用推進事業」を受け、福岡県内で３回実施したもの。

第１回「世界遺産と持続可能な観光」

日　時：令和７年１月 29 日（水）
場　所：アクロス福岡円形ホール
参加者数：63 名
内　容：
「地域と観光創造」西山 徳明（北海道大学 教授）
「世界遺産宗像・沖ノ島とまちづくり」
大森 洋子（久留米工業大学 教授）
「文化遺産と観光：東南アジアの事例」
田代 亜紀子（北海道大学 准教授）
「風景のインタープリテーション：台湾の事例」
仲間 浩一（(一社) リージョナルインタープリテーション代表理事）
パネル・ディスカッション
「世界遺産と持続可能な観光－世界遺産「神宿る島」沖ノ島と関連遺産群のこれから―」司会 正田　実知彦

第２回「加耶と沖ノ島」

日　時：令和７年２月 15 日（土）（同時通訳）
参加者数：129 名
場　所：九州国立博物館ミュージアムホール
内　容：
「世界文化遺産　加耶古墳群について」宋　源永（大成洞古墳博物館　館長）
「沖ノ島祭祀前夜の日韓交流」李　昌熙（大韓民国釜山大学校　教授）
「沖ノ島祭祀開始期の日韓交流」 高田　貫太
パネル・ディスカッション
「加耶と沖ノ島」司会　太田　智

第３回「沖ノ島祭祀を奉献品から考える」

日　時：令和７年３月８日（土）
場　所：海の道むなかた館講義室
参加人数：50 名
内　容：
「滑石製品から沖ノ島祭祀を考える」河野　一隆
「鏡から沖ノ島祭祀を考える」辻田　淳一郎
「武装具から沖ノ島祭祀を考える」橋本　達也
「金属製品から沖ノ島祭祀を考える」水野　敏典
パネル・ディスカッション
「沖ノ島祭祀を奉献品から考える」司会 岡寺未幾

（２）海外との連携に関すること

ア．　世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の価値を効果的に伝えるためのワークショップ

現地研修：令和６年４月 24 日（オンライン）
　　令和５月２日から６日（現地研修）
主催:九州大学、カセサート大学（タイ）、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

本遺産群は誰もが見て一瞬で価値がわかる遺産ではなく、信仰の場であり、長い歴史と文化様々な要素をあわせ持つ遺産である、国内外の来訪者に対して、やや複雑な本遺産群の価値をどのように伝えるのかが課題となっている。そこで、本遺産群の価値を国内外の人に効果的に伝える方法を考えるワークショップを九州大学、カセサート大学と本協議会が共同で行った。カセサート大学からはパティポン・ヨードスラーン准教授および大学院生９名、九州大学からは福島綾子准教授および学部生・大学院生 16 名（交換留学生３名を含む）

の計 27 名が参加した。

オンラインの事前研修で本遺産群の課題を事前に理解した上で、現地視察を行い、現地ではむなかた通訳サポートによる英語でのガイドで１日目に九州本土、２日目に大島の視察を行った。日数が限られていたものの、国内外の若い世代からの意見や提案を聞くことができたのは、非常に貴重な機会であった。

図４　新原・奴山古墳群での集合写真

イ．ICCROM 研修「世界遺産の文脈における影響評価に関するトレーナーズ・ワークショップ」

日　時：令和６年５月６日（月）～９日（木）
主　催：ICCROM-IUCN 世界遺産リーダーシッププログラム
場　所：イタリアローマ ICCROM 本部
参加者：岡寺未幾
内　容：ユネスコ、ICCROM、ICOMOS、IUCN が共同で発行した、影響評価のための最新の世界遺産リソースマニュアル「世界遺産の文脈における影響評価のためのガイダンスとツールキット」以降、遺産影響評価に関わるキャパシティビルディングの需要の高まりを受け、将来の影響評価に関するキャパシティビルディング活動に関与する人材に、リソース、ガイダンス、サポートを提供することを目的として行われた研修。

ウ．英国セインズベリー日本藝術研究所「NARA to Norwich」との連携事業

主催:セインズベリー日本藝術研究所、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
期間：令和６年５月 20 日（月）～５月 25 日（土）
場所：ノリッジ大聖堂
出張者：岡寺未幾、稲森康輔

セインズベリー日本藝術研究所の創立 25 周年を記念して行われたノリッジ・フォーラムでおこなわれた企画展「NARA to Norwich」の一環として、ノリッジ大聖堂で本遺産群の展示を行う機会をいただいた。NARA to Norwich は現在の中国とローマ帝国後の世界の限界を越えたシルクロードを探求する国際的共同研究プロジェクトで、その成果は、オンライン展示（https://naratonorwich.org/）に見ることが出来る。

年間 40 万人の来訪者を迎えるノリッジ大聖堂での展示では、レプリカ（三角縁神獣鏡・金製指輪・龍頭･奈良三彩）４点と復元品１点（カットグラス碗）の展示を行った。レプリカは令和２年文化庁補助事業「先端技術を活用した日本文化の魅力発信事業」で製作した三次元計測をして製作した高精細レプリカであり、また、カットグラス碗は宗像市立世界遺産ガイダンス海の道むなかた館所蔵の石田彩氏による復元品である。展示を行ったホストリーは大聖堂見学の入口に当たり、動線上、多くの人の眼に触れることになった。特に、レプリカについては立ち止まって覗き込み、パネルや動画を熱心に見てくれる方も多かった。日本の世界遺産や歴史・文化に非常に関心が高く、ぜひ宗像を訪れてみたいとの声もいただいた。大聖堂の解説ボランティアの方からは沢山の質問をいただき、また、不在の間、代わりに解説いただくなど、ご協力いただき感謝申し上げる。なお、本会場であるノリッジ・フォーラムでは期間中、「長谷寺大観音画軸」の巨大なレプリカが展示されるとともに、長谷寺から 10 名の僧侶が渡英、観音像の前で声明を唱えた。５月 21 日（火）には聖ピーター・マンクラフト教会で、宗教音楽をテーマとしたワークショップが行われ、聖歌隊が賛美歌、長谷寺が声明、ファビオ・ランベッリ氏が笙を演奏、190 名の参加者が熱心に聴き入っていた。５月 24 日（金）にはイーストアングリア大学にあるセインズベリーセンターでもワークショッ

プが行われた。5月25日(土)には、ノリッジ・フォーラムでのシンポジウム「イースト・アングリアにおけるキリスト教の到来」が開催され、その中で、本遺産群の概要を岡寺参事補佐が報告の機会をいただいた。セインズベリー研究所で行われた25周年記念レセプションにも参加させていただいた。大変貴重な機会をいただいたセインズベリー研究所とサイモン・ケイナー氏に感謝申し上げる。(岡寺)

図５　ノリッジ大聖堂

図６　大聖堂での展示の様子

エ．第５回世界遺産サイト・マネージャーズフォーラム

主　催：インド政府文化省付属インド考古学調査局、ユネスコ世界遺産センター等
期　間:令和６年７月18日（木）～７月25日（木）
場　所：ニューデリー（インド）
参加者：正田　実知彦

サイトマネージャーズフォーラムは、サイトマネージャー（世界遺産管理者）の国際的ネットワークを拡大し、国際的なレベルで知識や経験を交換する機会を創出することを目的としたもので、例年、世界遺産委員会にあわせて開催される。今回は、インドの首都ニューデリーで「遺産とコミュニティ」をテーマに開催され、34か国82名が参加した。本フォーラムに参加したことにより、世界各地のサイトマネージャーとネットワークを構築することができ、また、世界遺産の持続可能な管理を実現するために地域コミュニティの関わりが重要であることを再認識することができた。(正田)

オ．ACCU奈良「文化遺産の保護に資する研修2024（集団研修）―考古遺跡の調査記録と保存活用―」

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所（ACCU奈良）の依頼を受け、集団研修「文化遺産の保護に資する研修2024（集団研修）―考古遺跡の調査記録と保存活用―」の受け入れを行った。アジア・太平洋地域の文化遺産に関わる若手担当者15ヶ国15名を対象に「世界遺産沖ノ島の登録後の課題とマネジメント」をテーマに令和６年９月10日にオンラインでの事前研修、10月１日にみあれ祭、大島および宗像大社辺津宮、海の道むなかた館の現地視察を行った。なお、本遺産群の世界遺産登録にご協力いただいたガミニ・ウィジェスリヤ氏（ICCROM顧問アドバイザー、考古学、世界遺産）にも同行いただいた。参加者は熱心に参加いただき、特に、信仰の遺産である本遺産群における無形の要素の重要性や、コミュニティとの関わり、開発と世界遺産保護のバランスについて関心が高く感じられた。これほど大規模な国際研修の視察を受入は今回が初めてのことで、海外からの来訪対策についても、再考する得がたい機会となった。

図７　沖津宮遥拝所での集合写真

オ．世界遺産ボランティアプログラム2024バングラディシュ

主　催：PERCIVE
日　時：令和６年10月18日（金）
報告者：岡寺　未幾

ICOMOSバングラディッシュのファティハ・バブリー氏（PERCIVE代表）による世界遺産の保存管理の技術習得と実地研修をあわせたボランティア・プログラムにおいて、本遺産群の事例をオンラインで岡寺報告。テーマは「Experienced in Management, Conservation, Presentation and Interpretation of the Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region」。

カ．ユネスコ北京事務所「遺産管理の統合的アプローチに関する東アジアのためのキャパシティ・ビルディング・ワークショップ：有形・無形の相乗効果」

主催：ユネスコ北京事務所、WHITR-AP（世界遺産アジア・太平洋地域研修センター）北京事務所、WHIPIC（世界遺産インタープリテーション・プレゼンテーション国際センター）
日　時：令和６年９月27日（金）（オンライン）、令和６年10月21日（月）～24日（木）（対面式）
場　所：北京大学
参加者：岡寺　未幾、正田　実知彦

無形の要素をどう有形遺産の保存管理と統合して、効果的に価値を伝えるかについてのワークショップ。東アジアの13の世界遺産（中国（６資産）、日本（１資産）、モンゴル（２資産）、韓国（４資産））から集まった22名のサイトマネージャー（中国10名、日本２名、モンゴル３名、韓国７名）が参加して行われた。無形と有形双方の要素を持つ本遺産群としては、今後のインタープリテーションに活かしていきたい。

キ．ICOMOSアジア太平洋地域ウェビナーシリーズ「遺産影響評価」報告

主　催：ICOMOSマレーシア国内委員会
日　時：令和７年１月18日（土）
報告者：岡寺　未幾

アジア太平洋地域において遺産影響評価を実施するにあたっての問題や課題について議論することを目的に行われたウェビナーシリーズ「遺産影響評価」。第２回は東アジア地域で、日本、韓国、中国、香港、台湾の事例が報告され、本遺産群から岡寺がオンラインで本遺産群の事例報告を行った。概要についてはICOMOS Web Magazine2025年春号報告を参照されたい（https://icomosjapan-information.org/20241/2025spring-2025/icomos/）。

ク．NARA to NORWICHワークショップ

主　催：セインズベリー日本藝術研究所
日　時：令和７年２月４日（水）～７日（日）
出張者：福嶋 真貴子、岡寺 未幾、稲森 康輔

Nara to Norwichの次期プロジェクトを検討するためのワークショップに参加。シルクロードに関連するロンドンで開催中の３つの展覧会を（大英博物館、大英図書館、日本大使館）を見学、王立アジア協会での講演会に参加した。また、世界遺産マリタイム・グリニッジの構成資産である国立海洋博物館で、次期プロジェクトに関する会議が行われ、次回は、陸路だけでなく海路も含んだ海のシルクロードを対象とし、宗教と文化の交流に焦点を置くなど、次期プロジェクトの今後の方針が議論された。本遺産群としても、今後も連携を図って行きたい。

（岡寺）

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
https://www.munakata-archives.asia/

沖ノ島研究 第11号

令和7（2025）年9月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
（事務局：福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室）
〒812-8577　福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-3-8